

# 基礎縫いの技術に関する考察と被服製作に対する意識について

白坂 文

## A Study of Fundamental Sewing Skills and Concern about Clothing Construction

Aya SHIRASAKA

### Abstract

The first survey is for finding out the level of fundamental sewing skill of students in the clothing construction theory and practice course, as well as finding out the level of fundamental sewing skills at the completion of the course. The survey contained the list of sewing skills and the levels of proficiency. The students have taken the survey 3 times during the semester. The final survey showed that all students mastered the skills taught in the class.

The second survey was given to the students in the nutrition department and career creation department. The first purpose of the second survey is to find out which sewing tasks are practiced in current primary, middle and high schools home economics classes. The result revealed that sewing an apron is required at most primary, middle and high schools. Some high schools used shorts, yukata, and jin-be for sewing tasks.

Keywords: Fundamental Sewing 基礎縫い, Sewing Skill 縫製技術, Clothing Construction 被服製作

### 1. はじめに

本学キャリア創造学科ファッションデザインコースの専門科目である「服飾造形論及び実習Ⅰ」（以下、実習Ⅰ）の製作課題はセミタイトスカートである。スカートを製作していく上で、手縫いの縫製技術やミシンの操作及び縫製技術が必要不可欠であることはいう

までもない。表1のように小学校での家庭科は開隆堂出版株式会社（以下、開隆堂出版）と東京書籍株式会社（以下、東京書籍）の2社から教科書が出版されており「手縫い」（玉結び、玉どめ、並縫い、返し縫い、かがり縫い、ボタン付け）と「ミシン縫い」（直線縫い）の基礎技術を学び、被服製作においては身

の回りの生活に役立つ物の製作を行う<sup>(1)(2)</sup>。また中学校においても開隆堂出版と東京書籍の2社から教科書が出版されている。「まつり縫い」や「スナップ付け」など新たな手縫いの手法を学び、小学校での学習を活用・発展させ、被服製作においては生活を豊かにする物を製作する(表2)<sup>(3)(4)</sup>。さらに高等学校の家庭科になると、教科書の出版社は表3に示したように様々あるが、被服製作の作品は、概ね「ハーフパンツ」、「Tシャツ」、「はんでん」というように高い被服構成力や縫製技術を有する衣服の製作があげられている<sup>(5)~(16)</sup>。

このように、小・中・高等学校の家庭科では体系的に整理された被服製作を行うため、本学の実習Ⅰ履修学生は過去の家庭科教育での手縫いやミシン縫いの技能については習得済みで、被服製作作品も段階的に製作してきている。

しかしながら川端(2010)は、児童・生徒の手指の巧緻性低下の実態は、家庭科の実習においてはかなり以前から指摘されており、中でも被服製作学習においては、針に糸が通せない、玉結び・玉どめができないことから始まり、日常の生活の中で『縫う』ことの必要性の減少と相まって、学習内容が徐々に簡易化されながら今日に至っていると述べている<sup>(17)</sup>。また阿部ら(2006)は、全日本中学校技術・家庭科研究会の全国規模の調査によれば、家庭科学習後、生徒に学んでよかったと思う学習内容を質問した結果、現行学習指導要領の家庭科の2本柱である「生活の自立」と「家族と家庭生活」で重視されている「食物」と「保育」において生徒の学習成果の高いことが分かった。またこれからの中学生に必要なと思われる学習内容を質問した結果、「食物」、「幼児」、「地域とのかかわり」と続き、このことは学習満足度の高い「食物」と「保育」に加え、環境関連の項目が重視されていると報告しており、中学生の被服に対する意識の

低下が明らかとなっている<sup>(18)</sup>。それに加え、文部科学省(以下、文科省)は小・中学校の新学習指導要領を1998年12月14日に告示し、小学校家庭科では「ほころび直し」を<sup>(19)</sup>、中学校技術・家庭科では「手芸」を削除項目としてあげている<sup>(20)</sup>。高等学校においては家庭総合では「生活の科学と文化」の中に被服製作の内容が盛り込まれてはいるが、家庭基礎では「家族の生活と健康」等の一部として扱われ実質的な削除となった<sup>(21)</sup>。

このように、小・中・高等学校の家庭科教育の中で、布を使った物づくりの必然性が低下し、布と針を持つ機会が大幅に減少していることから、過去の家庭科教育で被服製作を経験してきている学生たちであっても、家政系学部や被服製作実習を目的とする大学及び短期大学に入学した時点では、被服製作実習を円滑に行うだけの手縫い・ミシン縫いの縫製技術を習得できていないのが現状といえる。

そのため、被服製作実習では製作する課題作品に併せ、課題製作で用いる手縫いやミシン縫いの縫製技術や特殊ミシンの操作方法等の習得を目的とした「基礎縫い」を行うことが通常であり、基礎縫いに関するデジタル教材の作成もされてきている<sup>(22)</sup>。実習Ⅰにおいてもセミタイトスカートの製作と並行して基礎縫いを行うことにより、手縫い・ミシン縫いの縫製技術の習得と縫製技術の向上により、スカート製作が円滑に行えたことを「基礎縫いアンケート」①②③での調査によって明らかにしたい。

また「被服製作に関するアンケート調査」を行うことにより、小・中・高等学校の家庭科教育での被服製作の現状を把握することとする。

表 1. 小学校で扱う被服製作の作品<sup>(1)(2)</sup>

出版社	教科書	被服製作の作品例
開隆堂	わたしたちの家庭科5.6	・ネームプレート ・カード入れ ・三角定規入れ ・ティッシュペーパー入れ ・ランチョンマット ・クッション ・マルチカバー ・まくらカバー ・マイバッグ ・ナップザック ・エプロン ・カフェエプロン
東京書籍	新編新しい家庭	・ワッペン ・小物入れ ・三角定規入れ ・ペン入れ ・ポケットティッシュ入れ ・ウォールポケット ・ランチョンマット ・エプロン ・トートバッグ ・きんちやく ・クッションカバー

表 2. 中学校で扱う被服製作の作品<sup>(3)(4)</sup>

出版社	教科書	被服製作の作品例
開隆堂	技術・家庭家庭分野	・道具入れ ・ウォールポケット ・カフェエプロン ・ショルダーバッグ ・ファイルカバー ・ブックカバー ・ペットボトルカバー ・防災リュック ・ハーフパンツ
東京書籍	新しい技術・家庭家庭分野	・ティッシュボックスカバー ・箸袋 ・ランチョンマット ・ファスナーポーチ ・トートバッグ ・ファイルカバー ・ブックカバー ・ウォールポケット ・防災リュック ・ハーフパンツ

表 3. 高等学校で扱う被服製作の作品<sup>(5)~(16)</sup>

出版社	教科書	被服製作の作品例
実教出版	家庭総合	・Tシャツ ・パンツ ・基平
	新家庭総合	・Tシャツ ・基平
	新家庭総合21	・ショートパンツ ・Tシャツ ・はんでん
教育図書	家庭総合	・ベスト ・パンツ
	家庭総合	・バジャマ ・シェフエプロン
	新家庭総合	・ハーフパンツ ・ワーキングウェア ・オリジナルはっぴ
大修館書店	家庭総合	・ハーフパンツ ・パーカー
	新家庭総合	・はんでん ・ハーフパンツ ・パーカー
開隆堂	家庭総合	・ハーフパンツ ・Tシャツ ・はんでん ・エプロン
第一学習社	家庭総合	・ハーフパンツ ・キュロットスカート ・リバーシブルベスト ・乳幼児の基平 ・リバーシブルエプロン
	家庭総合	・リバーシブルベスト ・ハーフパンツ ・単エプロン
東京書籍	家庭総合	・リバーシブルベスト ・ハーフパンツ ・単エプロン
一橋出版	家庭総合	・はんでん ・ショートパンツ ・リフォームバジャマ

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期

「基礎縫いアンケート」①②③とも服飾造形論及び実習Ⅰの授業内に実施。①は初回授業の2018年4月6日、②は中間時期の6月1日、③は最終授業の7月25日に実施。

「被服製作アンケート」は2018年7月18日の授業内に実施した。

### 2.2. 調査対象

「基礎縫いアンケート」①②③は2018年度キャリア創造学科ファッションデザインコース入学生で、服飾造形論及び実習Ⅰを履修している6名。「被服製作アンケート」は2018年度食物栄養学科入学生121名と、キャリア創造学科入学生90名の計211名である。

### 2.3. 調査方法

調査項目の「基礎縫いアンケート」①②③は、手縫い・ミシン縫いの基本的な手法として並縫いをはじめとする13種類をあげ(表4に3種類の例を示す)、それぞれの手法の能否について学生自身が「全くできない = 1point (以下、pt)」、「あまりできない = 2pt」、「どちらでもない = 3pt」、「できる = 4pt」、「よくできる = 5pt」の5段階評定にチェックさせ、記述欄には習得した時期や感想を自由に記入させた。

「被服製作アンケート」については以下の内容をきいた。

◇家庭でのミシンの所有の有無

◇ミシンの所有者

◇小・中・高等学校家庭科での被服製作経験の有無

◇製作作品の種類

◇被服製作が好きか嫌いか

◇被服製作が得意か不得意か

アンケート調査は全数調査とし、「基礎縫いアンケート」、「被服製作アンケート」とも無記名式質問用紙調査法を用いるが、学科・コースについては記入することとし、調査票は直接配布・回収した。調査項目によっては選択方式と自由記述方式を併せて実施した。なお、調査の主旨およびアンケートの回答は授業評価には影響しないことを説明し、回答をもって同意とみなした。

表 4. 基礎縫いアンケート例

並縫い	ぐし縫い	本返し縫い
全くできない あまりできない どちらでもない できる よくできる	全くできない あまりできない どちらでもない できる よくできる	全くできない あまりできない どちらでもない できる よくできる
<できなかった人> ・初めて聞いた ・名前を知っていた <できた人> ・どこで習った?( )	<できなかった人> ・初めて聞いた ・名前を知っていた <できた人> ・どこで習った?( )	<できなかった人> ・初めて聞いた ・名前を知っていた <できた人> ・どこで習った?( )

### 2.4. 集計・検定方法

「基礎縫いアンケート」、「被服製作アンケート」とも単純集計、クロス集計、有意差検定を行った。有効回答率は「基礎縫いアンケート」に関しては100%、「被服製作アンケート」は92.9%であった。

## 3. 結果及び考察

### 3.1. 基礎縫いアンケート

基礎縫いの手法は「並縫い」、「ぐし縫い」、「本返し縫い」、「半返し縫い」、「置きじつけ」、「千鳥掛け」の6種類の縫製技術の能否について。「端ミシン」、「裁ち目かがり」、「ロックミシン」、「ブランケットステッチ」、「流しまつり」、「バイアス布始末」、「奥まつり」といった布端の始末7種類の縫製技術の能否を、実習Ⅰの授業1回目、8回目、15回目にそれぞれに実施した。

図1によると、「並縫い」の1回目アンケート時(以下、1回目)の習得率の平均が4.3ptで、早い段階で高い習熟度がうかがえる。8回目アンケート(以下、8回目)時の習得率で既に5.0ptである。この縫製手法は小学校家庭科で既に学んでおり、並縫いは特に繰り返し使う機会が多いためと考えることができる。

「ぐし縫い」は小・中学校家庭科の中で習得する内容ではないが、高等学校で衣服製作を行う場合は学ぶ縫製手法である。ぐし縫いの縫製方法は並縫いと同様、2枚の布を表裏約2mmの細かい針目で縫うものである。“ぐ

し縫いという名称を聞いたことがない”との意見が自由記述には多く見られたが、1度指導すると直ぐ習得することができたため、8回目4.7pt、15回目アンケート時(以下、15回目)5.0ptと習熟度は非常に高い。

「本返し縫い」は1回目で3.7ptと比較的習熟しており、8回目で4.2pt、15回目には5.0ptと早い段階で習熟している様子が分かる。これは本返し縫いも小学校家庭科教育の中で既に学んでいることがいえる。

「半返し縫い」は1回目で3.2pt、8回目で4.2ptであるが、15回目には5.0ptと習熟している。半返し縫いも小学校で学んでいるが、本返し縫いの縫製手法と似かよっており、8回目の段階ではまだ縫製手法が曖昧であった。しかし15回目では5.0ptと習得率は上限に達した。

「置きじつけ」に関しても小・中学校での習得はないため、置きじつけという名称を聞いたことがないとの意見が多く聞かれたが、1度指導すると直ぐ習得することができた。8回目には4.8pt、15回目には5.0ptで早い段階での習熟といえる。

「千鳥掛け」は手縫いの技術の中でも最も難易度が高い縫製手法である。よって1回目の習熟度は1.3ptと低く、8回目で3.0pt、15回目でも4.5ptと習得率は上限に達していない。

「端ミシン」と「裁ち目かがり」に関しては、小・中学校家庭科教育でかがり縫いとミシン縫いを習得しているにも関わらず、1回目には端ミシンが1.3pt、裁ち目かがりが1.8ptというように習熟度が低い。“小学校で習ったが縫い方を忘れていた”や“縫い方の名称を見ても思い出せなかった”と自由記述には見られた。8回目には端ミシンは4.5ptと大きく習熟しており、15回目は4.7ptとなった。裁ち目かがりは8回目には3.8pt、15回目には4.7ptと習熟度は上昇している。

「ロックミシン」は特殊ミシンのため、中・

高等学校で所有している学校は限られている。そのため1回目は1.5ptと習熟度は低い。またロックミシンは布を切り落としながらかがり縫いを行うため、操作に恐怖心を抱く学生もいる。1回目、8回目、15回目の記述欄には、“布を切り落とすのが怖い”や“ロックミシンのスピード調整が難しい”、“切り落とす分量は何度もやらないと掴めない”という意見が常であり、縫製経験を積んでいくにもかかわらず、恐怖心がなかなか薄れないことが分かる。8回目3.8pt、15回目4.7ptと習得率は上限に達していない。

「ブランケットステッチ」は小学校家庭科で、フェルトのマスコットや小物を製作する際によく用いられる縫製手法である。ここでの製作経験が多い者はブランケットステッチを習得できているということになるが、ここでは経験者が少なく1回目の習熟度は2.0ptであった。8回目の習熟度は3.7ptと比較的高くなってはいるが、15回目は4.7ptと習得率は上限に達していないことが分かる。

「流しまつり」、「奥まつり」については中学校家庭科で習得する「まつり縫い」の応用形となる。「流しまつり」は1回目1.3pt、8回目3.7ptと低い習熟度で、15回目では4.7ptの習熟率に上昇している。「奥まつり」は布端にロックミシンをかけ、その端より5mm内側に置きじつけを行い、布端を表側に折り返した際にまつり縫いを行うという手法で難易度が高い。よって1回目の習得は1.0ptとかなり低く、8回目でも3.2pt、15回目で4.3ptと上限には達していない。

「バイアス布始末」の縫製技術は、今回採用した基礎縫いの縫製手法の中で最も難易度が高いといえる。まずバイアステープ自体を事前に製作する必要がある、バイアス布の裁ち方やアイロンのかけ方にも注意が必要である。バイアス布を裁った後、両側の布端をアイロンで折りバイアステープを完成させる。片側の折り目を広げたバイアステープと布を

裁ち端同士で合わせミシンをかけ、布端をバイアステープでくるみアイロン。片側のバイアステープの折山と布をまつり縫いするという工程があり、非常に難易度が高い。よって習熟度は1回目1.0pt、8回目2.7pt、15回目4.2ptと基礎縫いの中で一番低い結果となった。

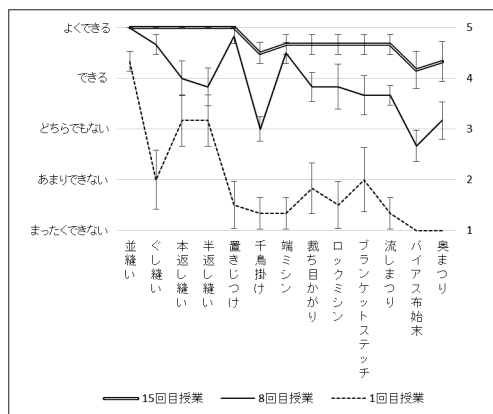


図 1. 基礎縫いアンケート結果

### 3.2. 被服製作に関するアンケート ＜ミシンの所有の有無と所有者＞

ミシンが家庭にあるという回答の学生は61.2%で、ないが34.2%、分からないが4.6%と、半数以上の家庭にミシンがあるという現状が明らかとなった(図2)。

次にミシンが家庭にあると答えた学生の中でミシンの所有は母が86.4%を占めており、次に祖母が7.2%、自分が5.6%と続いている。既に自分自身でミシンを所有している学生が5.6%ではあるが驚きである。

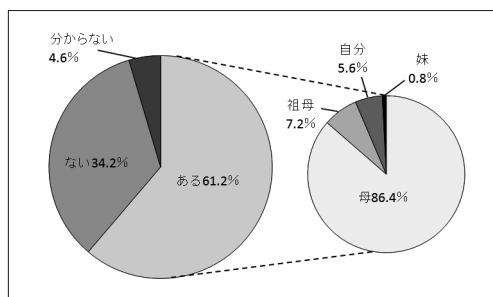


図 2. ミシンの所有の有無と所有者

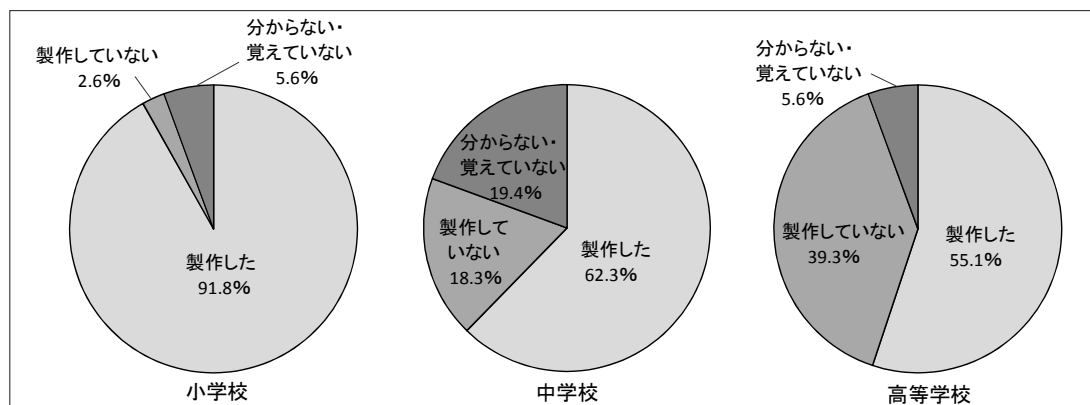


図3. 小・中・高での製作の有無

る。また非常に少数ではあるが妹も0.8%と所有している現状が明らかとなった。

### <小学校での被服製作経験と製作作品>

小学校家庭科での被服製作は91.8%と多くの学生が経験している結果であるが(図3)、小学校では男女全員の児童が被服分野を学び、被服製作を行うこととなっているため、ここでは100%の回答となるはずである。「製作していない」や「分からない・覚えていない」と回答している学生は、製作経験について失念していると思われる。

続いて表5は小学校での被服製作作品の種類であるが「エプロン」123件、「ナップザック」106件、「巾着袋」31件と作品件数の多い順である(複数回答可)。製作作品に関しては、小学校の家庭科教科書に準じ、小物入れやエプロン、袋物を製作している様子がわかる。

また小学校の被服製作作品数と作品の難易度には強い相関があり(相関係数=0.930、有意水準5%で有意な相関あり)(図4)、小学校の製作作品数は中学校での製作作品数(相関係数0.190、有意水準5%で有意な相関あり)と、中学校での作品の難易度に相関がある(相関係数=0.150、有意水準5%で有意な相関あり)。

\*作品の製作難易度に関しては、表6に示し

表5. 小学校 被服製作作品

	作品名	回答者数
小学校	エプロン	123
	ナップザック	106
	巾着袋	31
	手さげかばん(トートバッグ)	11
	ティッシュケース	6
	フェルトマスコット	5
	クッションカバー	3
	ブックカバー	3
	小物入れ	3
	弁当袋	3
	刺繍ハンカチ	2
	体操服入れ	2
	枕カバー	2
	その他	9

(複数回答)

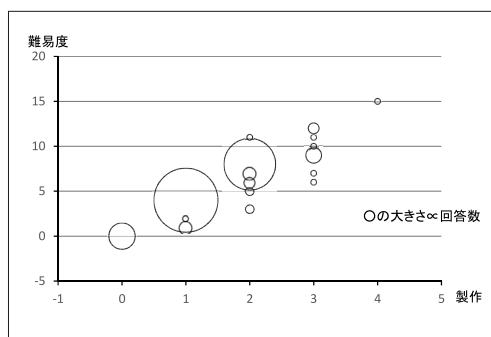


図4. 小学校 製作作品数と作品の難易度の相関

表 6. 作品の製作難易度

作品名	難易度	作品名	難易度
ぞうきん	1	ティッシュカバー	3
フェルト小物	1	ティッシュカバーケース	3
ティッシュケース	1	ティッシュケースカバー	3
ブックカバー	1	クッションカバー	3
ペンケース	1	メガネケース	3
ポーチ	1	エプロンの帽子	3
小物入れ	1	ペットボトル入れ	4
箸袋	1	ペットボトルケース	4
布巾(刺繍)	1	水筒の袋	4
刺繍ハンカチ	1	弁当袋	4
刺繍入りコースター	1	巾着袋	4
ランチョンマット	1	体操服入れ	4
三角巾	1	防災袋	4
枕カバー	1	ナップザック	4
フェルトマスコット	2	防護リュック	4
クッション	2	エプロン	4
クリスマスオーナメント	2	手さげかばん(トートバッグ)	4
抱き枕	2	スカート	7
ぬいぐるみ	2	ワンピース	7
布おもちゃ	2	ショートパンツ	7
がま口ケース	2	ブルオーバースラウス	7
がま口財布	2	割烹着	7
マフラー	2	甚平	7
ウォールポケット	2	子ども用の着物	7
		浴衣	7
		浴衣(子ども用)	7

た通り、1 から 7 に数値化した。

<中学校での被服製作経験と製作作品>

中学校での被服製作は 62.2% と半数以上の学生が経験しているが、小学校時と比較すると被服製作経験者が減少している (図 3)。中学校「技術・家庭」家庭分野においては、平成 10 年に告示された学習指導要領で被服製作の内容が選択科目となったことで被服製作を行わない生徒が増加したが、その後平成 20 年の学習指導要領では家庭科分野において被服製作が必須に戻された<sup>(23)</sup>。しかしながら家庭科教員の裁量により、学習指導要領が戻された後においても、被服製作が削減されている現状がこの結果によって想像できる。

被服製作作品の種類は「エプロン」70 件、「巾着袋」14 件、「手さげかばん (トートバッグ)」9 件の順で製作件数が多く (複数回答可) (表 7)、既に小学校での被服製作作品として製作している作品の多くが中学校でも製作されており重複していることが分かる。中

学校家庭科の教科書に準じ製作するのであれば「トートバッグ」、「ウォールポケット」、「ハーフパンツ」等を製作するところであるが、アンケートの結果によるとこれらは少数であることが分かる。本来であれば小学校での被服製作の技術を活用・発展した作品を中学校で製作する必要があるが、小学校から中学校へ体系立てられていない結果が明らかとなった。

また中学校の製作作品数は高等学校での製作作品数 (相関係数 = 0.200、有意水準 5% で有意な相関あり) と、高等学校での作品の難易度に相関がある (相関係数 = 0.200、有意水準 5% で有意な相関あり)。さらに中学校の製作作品数は被服製作が得意と相関がある (相関係数 = -0.230、有意水準 5% で有意な相関あり)。中でも被服製作が好きと、被服製作が得意については強い相関がみられた (相関係数 = 0.750、有意水準 5% で有意な相関あり) (図 5)。さらに中学校での製作作品数と中学校での作品の難易度にも強い相

表 7. 中学校 被服製作作品

	作品名	回答者数
中 学 校	エプロン	70
	巾着袋	14
	手さげかばん(トートバッグ)	9
	クッションカバー	7
	ナップザック	5
	小物入れ	3
	刺繍入りコースター	3
	布おもちゃ	3
	ペンケース	2
	ブックカバー	2
	ティッシュケースカバー	2
	ランチョンマット	2
	三角巾	2
	ぬいぐるみ	2
	ウォールポケット	2
	ハーフパンツ	2
その他	8	

(複数回答)

関があり（相関係数 = 0.900、有意水準 5% で有意な相関あり）、中学での作品の難易度と学科選択にも相関がみられる（相関係数 = 0.150、有意水準 5% で有意な相関あり）。

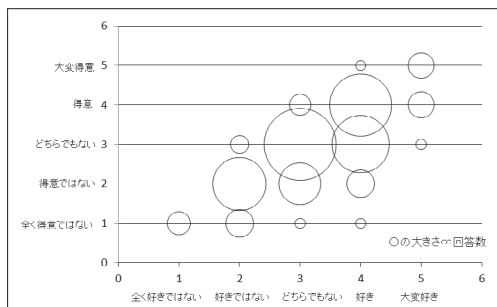


図 5. 中学校 被服製作が好きと被服製作が得意の相関

### ＜高等学校での被服製作経験と製作作品＞

高等学校での被服製作は 55.1% と半数の学生が経験している（図 3）。高等学校家庭科では前述のように、被服製作の内容を含まない「家庭基礎」を選択する場合があります、被服製作経験がない学生が半数近くいることが分かる。被服製作作品の種類については表 8 に示した通り「エプロン」62 件、「ショートパンツ」14 件、「巾着袋」11 件と続いているが、高等学校においても既に小・中学校で製作している「エプロン」や「巾着袋」を製作しており、ここでも小・中・高等学校での体系化がとられていない現状が明らかとなった。しかし一方では、製作作品の中に「ショートパンツ」、「甚平」、「浴衣」、「プルオーバーブラウス」、「ワンピース」といった衣服についても少数であるが製作していることが分かった。衣服製作は高い被服構成力や縫製技術を有するため、この場合は小・中学校からの体系化が図られている内容といえる。

また高等学校での製作作品数と作品の難易度には強い相関があり（相関係数 = 0.940、有意水準 5% で有意な相関あり）（図 6）、高等学校での製作作品数と被服製作が得意についても相関がみられる（相関係数 = -0.150、

表 8. 高等学校 被服製作作品

作品名	回答者数
エプロン	62
ショートパンツ	14
巾着袋	11
手さげかばん(トートバッグ)	9
甚平	5
浴衣	4
クッションカバー	4
布おもちゃ	3
布巾(刺繍)	2
ブルオーバーブラウス	2
ティッシュカバーケース	2
ワンピース	2
その他	9

(複数回答)

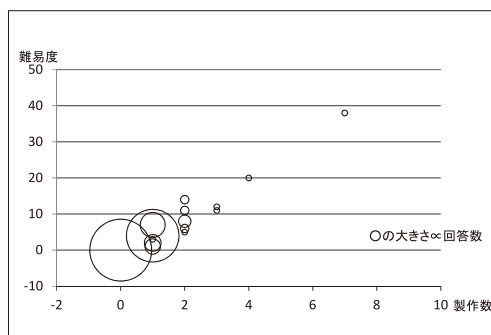


図 6. 高等学校 製作作品数と作品の難易度の相関

有意水準 5% で有意な相関あり）。

### 4. 結語

「基礎縫いアンケート」①②③の結果から、実習 I の履修学生の縫製技術については、被服製作の機会が少ない場合は習熟に時間がかかることが明らかとなった。「並縫い」のように理解しやすい縫製手法は 1 回目から習得度が高く、その他「千鳥掛け」のように縫製手法を過去に学んだ経験のないものに関しては 1 回目より 8 回目、8 回目より 15 回目と縫製経験を積むほど習熟度が増すということが明らかとなった。



また、セミタイトスカート製作においても基礎縫いを行ってからスカートの縫製に入るため、失敗がなく円滑に作業が行え、極端に作業ペースが遅い学生がおらず、実習Ⅰ履修者の足並みが揃った状態で実習を終えることができた。

「被服製作アンケート」では小・中・高等学校とも被服製作作品の種類は「エプロン」と「巾着袋」が圧倒的に多く、特に高等学校においては家庭科教員の裁量で被服製作作品が選定されており、既に小・中学校で製作している作品の重複が見られ、小・中・高等学校で被服製作作品の体系化がとられていない現状が明らかとなった。

## 5. 今後の課題

「基礎縫いアンケート」に関しては、今年度の実習Ⅰ履修学生が6名と少数であったため、経年変化を調査するなどして今後は調査の精度を高めていく必要があると考える。

また、今回は授業内に著者が基礎縫いの縫製手法の見本を見せることができたが、学生が事前・事後学習で縫製手法を学習する場合、テキストや補助プリントだけでは理解が難しいと思われる。現在、基礎縫いに関するデジタル教材の開発が進んでいる。これは一般に公開されているものも多くあり、学生には縫製手法を動画で見せることも今後検討していきたい。

加えて、中学校や高等学校と連携し、小・中・高等学校の体系化に配慮した被服製作課題についても検討していきたいと考える。

## 引用・参考文献

- (1) 小学校家庭科用文部科学省検定済教科書「わたしたちの家庭科 5. 6」開隆堂出版, 2017
- (2) 小学校家庭科用文部科学省検定済教科書「新編新しい家庭」東京書籍, 2017
- (3) 中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書「技術・家庭 家庭分野」開隆堂出版, 2010
- (4) 中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書「新しい技術・家庭 家庭分野」東京書籍, 2010
- (5) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」実教出版, 2008, p174～p181
- (6) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「新家庭総合」実教出版, 2008, p172～p176
- (7) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「新家庭総合 21」実教出版, 2008, p158～p165
- (8) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」教育図書, 2008, p171～p175
- (9) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」教育図書, 2008, p102～p121
- (10) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「新家庭総合」教育図書, 2008, p162～p169
- (11) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」大修館書店, 2008, p166～p169
- (12) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「新家庭総合」大修館書店, 2008, p184～p189
- (13) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」開隆堂出版, 2008, p168～p175
- (14) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」第一学習社, 2008, p168～p178
- (15) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」東京書籍, 2008, p170～p174
- (16) 高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書「家庭総合」一橋出版, 2008,

p143 ~ p149

- (17) 川端弘子, 田中美幸, 鳴海多恵子「生活の自立, 学力と児童の手指の巧緻性に関する研究」日本家政学会誌 Vol. 61, No.2, 2010, p73
- (18) 阿部睦子, 深澤千聡, 葦塚節子, 森本静子, 亀井祐子, 三野直子「中学生にみる家庭科学習に対する意識」『日本家庭科教育学会誌 49』2006, p7 ~ p8
- (19) 文部科学省小学校学習指導要領 1998
- (20) 文部科学省中学校学習指導要領 1998
- (21) 文部科学省高等学校学習指導要領 1999
- (22) 末弘由佳理, 本田クミ, 大西かおり, 中尾時枝「被服教育における基礎縫いデジタル教材の効果」武庫川女子大情報教育研究センター紀要 2015, p1 ~ p2
- (23) 文部科学省学習指導要領  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youryou/main4\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm) (参照日 2018年9月18日にアクセス)